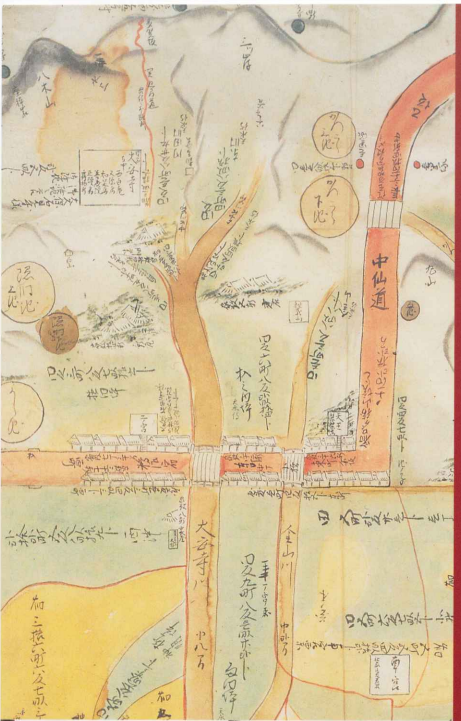




探してみよう 歴史の足跡

中山道と鶴沼宿



いあいさじ

このたび資料調査報告書第三十一号「探してみよう 歴史の足跡 中山道と鶴沼宿」を刊行いたします。

江戸時代、この各務原市域を東西に横切る中山道の周りには「此の野に田畑なし唯青草のみ生ず」と江戸時代前半の人、貝原益軒が書いた『岐蘇路記』に記されているように野原が広がり、「寂しい難所」と呼ばれていました。その寂しい難所の東には中山道五十二番目の宿場・鶴沼宿、西には「間の宿」新加納があり、旅人の疲れを癒す場でした。

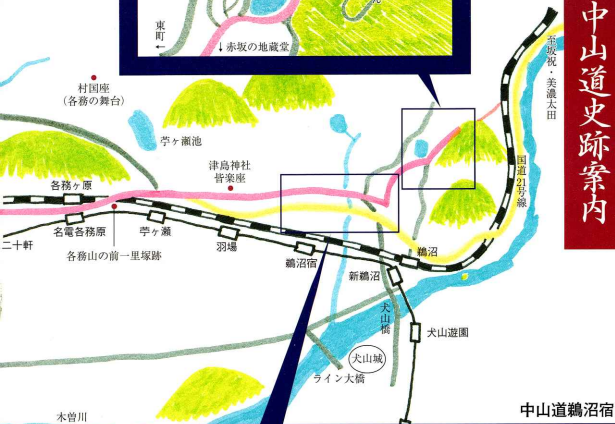
現在の各務原市内を東西に延びる国道二十一号線のバイパスを通って多くの人々や荷物が自動車などで足早に移動し、道沿いに多くの商業施設が並んで賑わい往時の面影はほとんどありません。しかし、少し車を降りて昔の中山道を歩いてみてください。きっと江戸時代の面影があちこちにのこっているはず。その発見の一助としてこの本を利用していただければ幸いです。

平成二十年三月

各務原市歴史民俗資料館

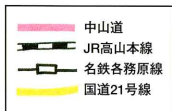
かかみがほら
各務原市内の中山道史跡案内

うとう峠付近



中山道鶴沼宿





◇ごあいさつ 1

◇各務原市内の中山道史跡案内 2

◇目次・例言 4

◇中山道・鵜沼宿 5

中山道 6

鵜沼宿 8

本陣 10

脇本陣 12

問屋 13

助郷 14

旅籠 15

宿場のさまざまな設備 16

寂しい難所・かかみ野の伝説 18

間の宿・新加納 20

◇街道・宿場の雑字事典 21

中山道の基礎知識 22

中山道を彩る人々 24

庶民の旅 26

宿の機構 28

宿泊施設 30

◇索引・参考文献 31

◇奥付 32

例言

一、本書は、江戸時代の街道と宿場の様子について、当時の主要街道の一つであった中山道と、その宿場・鵜沼を中心として紹介したものです。

一、記述にあたっては、なるべく平易な表現にするよう留意し、和暦については西暦を併記しました。

一、本書に掲載した写真などの資料は、原則として原板・原資料の所蔵者を明記しました。所蔵者を明記していないものは、各務原市歴史民俗資料館の所蔵する資料です。

中山道・鶴沼宿

中山道

鶴沼宿

本陣

脇本陣

問屋

助郷

旅籠

宿場のさまざまな設備

寂しい難所・かかみ野の伝説

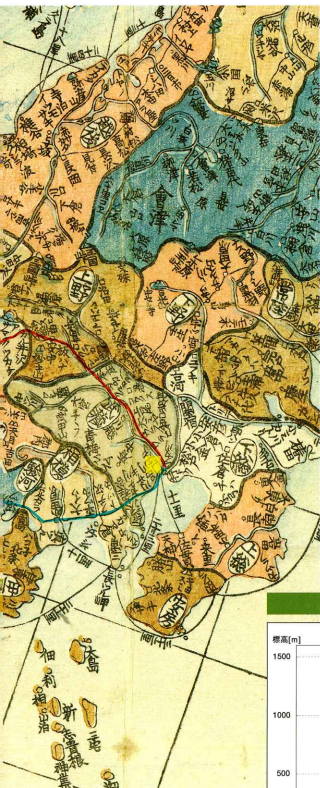
間の宿・新加納

中山道

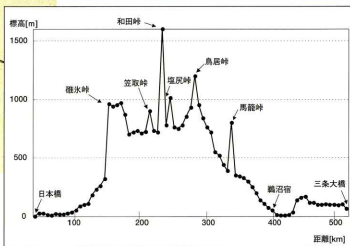
なかせんどう

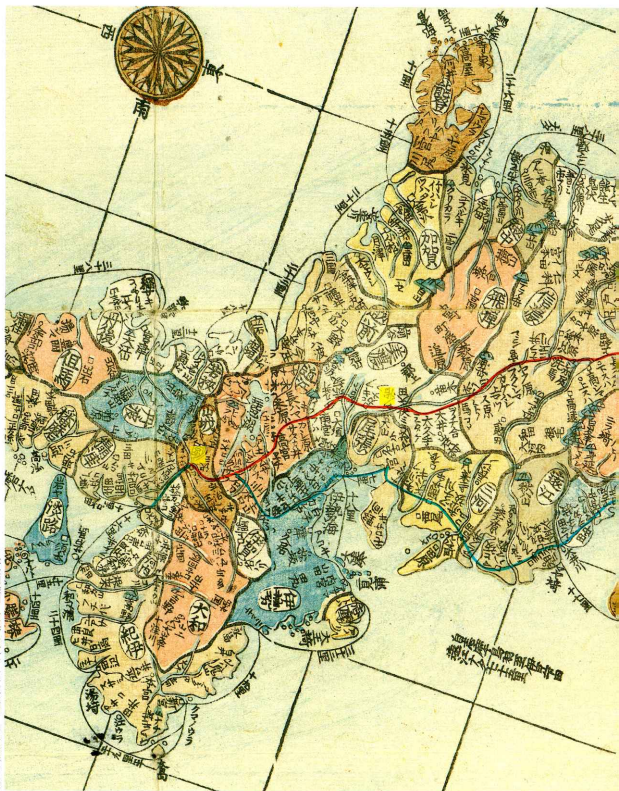
中山道は、現在の東京都・埼玉県・群馬県・長野県・岐阜県・岐阜県・滋賀県を通っていた街道です。東海道と比べると交通量は多くはありませんでしたが、江戸と京・大坂を結ぶ重要な道でした。

全部で六十九ある中山道の宿場のうち、美濃国（現在の岐阜県）には十六の宿場がありました。平成十七年（二〇〇五）二月十三日の市町村合併により信濃国（現在の長野県）に属していた馬籠が岐阜県に編入され、岐阜県内の宿場数は十七になります。



中山道標高図





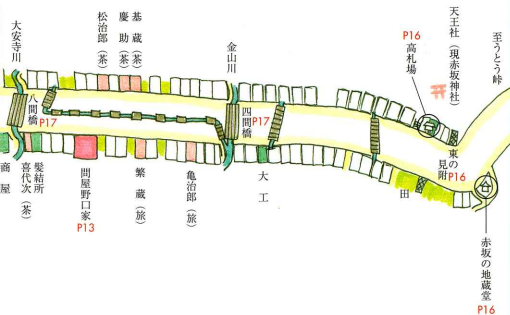
日本全国絵図 天保八年(一八三七)再刻 桜井美保子氏蔵

中山道基本データ (江戸～京)
 全長：135里24町8間 (約533.8km)
 宿場の数：69
 ※草津で東海道と合流

<参考>東海道
 全長：126里6町1間(約495.5km)
 宿場の数：53
 1里=36町=3.9km
 1町=60間=110m

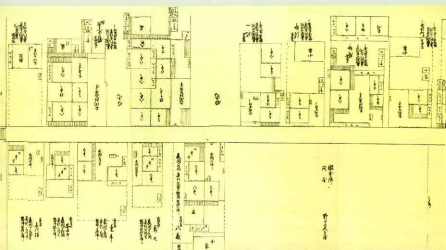
鶉沼宿

江戸から中山道を京に向かうと五十二番目にたどり着く宿場が鶉沼宿です。東の太田宿（現在の美濃加茂市）からは二里（約八km）ほどですが、観音坂やうとう峠の難所があります。一方西の加納宿（現在の岐阜市）へは四里十町（約十七km）もの長丁場でした。



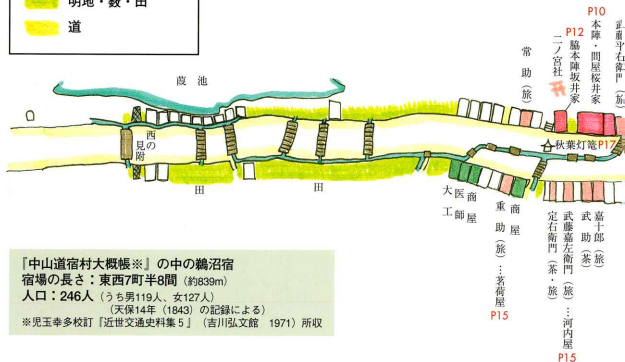
家並図

「鶉沼宿家並絵図」（中島家文書）は、長さ10mにも及ぶ長大な絵図で、宿場内の家々の間取りが描かれています。



大安寺川より東町（一部）

- 本陣・脇本陣・問屋
- 旅籠・茶屋
- 商家・大工など
- 川・池・水路
- 明地・藪・田
- 道

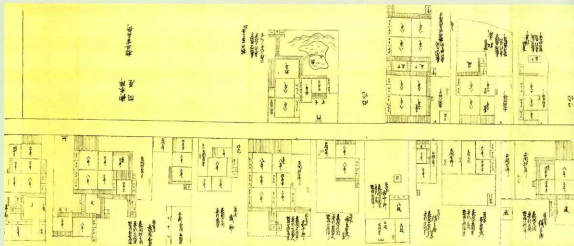


『中山道宿村大概帳※』の中の鶴沼宿

宿場の長さ：東西7町半8間 (約839m)

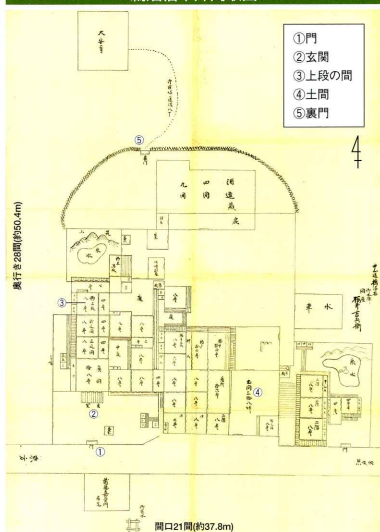
人口：246人 (うち男119人、女127人)
(天保14年(1843)の記録による)

※児玉幸多校訂『近世交通史料集5』(吉川弘文館 1971)所収



大安寺川より西町 (一部)

鶴沼宿本陣間取図



鶴沼宿本陣絵図（年月未詳） 桜井美保子氏蔵

本陣は、大名・公家・幕府役人などの宿泊施設です。鶴沼宿では江戸時代を通じて西町の桜井家が務めました。

本陣



尾張徳川家より拝領の手水鉢

桜井家

徳川家康によって中山道の宿駅が整備されたころから江戸時代を通じて本陣と問屋を務め、西町の庄屋も兼ねていました。明治に入り宿駅制が廃止されると、本陣の一部は小学校として利用されるようになりました。

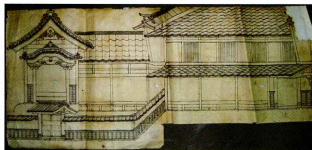
桜井家文書

本陣を務めた桜井家には、宿場や本陣に関する古文書が多く残されています。それらの資料は桜井美保子氏が所蔵され、現在各務原市に寄託・保管されています。

宿割帳の一部



※宿割帳…大名の通行などの際、どの旅館に誰が泊まるのかを記したものだ。



鶴沼宿本陣絵図面(全月未詳)

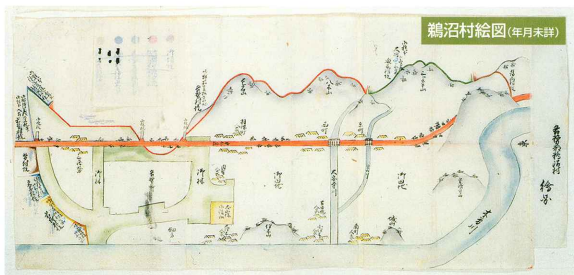
右絵図のように、本陣には三十八坪(約百二十五㎡)の広い土間がありました。また、裏門から一㎏ほど離れた大安寺まで小道が通っていて、非常時の避難場所となっていました。



「桜井吉兵衛」の名の入った印

吉兵衛は、江戸時代後期に当主を務めました。

鶴沼村絵図(年月未詳)



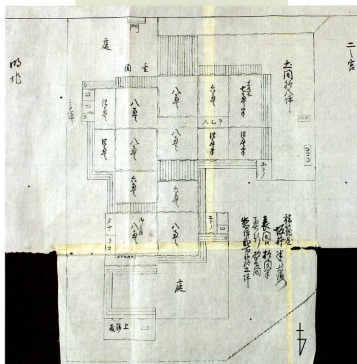
※当ページの図版四点は全て桜井美保子氏蔵

脇本陣

大名の通行が重なった場合、格下の大名は脇本陣を利用しました。他にも公用の武士などが脇本陣を利用しています。鶴沼宿で脇本陣を務めた坂井家は本陣の半分ほどの規模でしたが、玄関や門構え、上段の間を備えていました。幕末には坂井家に代わって東町の間屋・野口家が脇本陣を務めました。

坂井家

(安政五年(一八五八))
脇本陣が野口家に移った後は、下の絵図にみられるように単なる旅籠屋として営業してました。



脇本陣坂井家間取図 (『鶴沼宿家並絵図』より)

松尾芭蕉

(一六四四～一六九四)

芭蕉は、鶴沼宿を三回訪れ、坂井家に宿泊しています。その際に次の俳句を残したといわれています。



坂井家跡地に立つ句碑(鶴沼西町)

貞享五年(一六八八)七月頃
汲溜の

水泡立つや

蟬の聲

同年八月頃
うる間の宿酒井(坂井)氏にやどりて
ふぐ汁も

喰へば喰せよ

菊の酒

桃青

(桃青…芭蕉と名乗る前の俳号)

問屋

問屋は、旅人・荷物の輸送事務や宿場内のさまざまな事務を行うところ。問屋の下では年寄・帳付・人馬指などの宿役人が働いていました。鶴沼宿では東町の野口家と、西町の桜井家が務めました。

野口家

(安政五年(一八五八)〜脇本陣と兼任)
鶴沼宿の問屋・東町庄屋を兼務していました。現在屋敷は取り壊されて残っていません。



問屋・野口家があった場所

宿役人の種類と主な仕事

- 問屋(役)** 問屋場で荷物の継立や宿場内の運営・事務を行う。
- 年寄** 問屋の補佐として事務を行う。
- 帳付** 問屋・年寄の下で人馬の出入りや賃銭などを記録する。
- 人馬指** 人足指・馬指とも。荷物を運ぶ人足や馬を割りあてる。

宿札(宿場札)

宿場内だけで通用した紙幣で、問屋場の役人が保証人となっていました。左の資料はいずれも他の宿場で使われていたものですが、鶴沼宿でも同じような宿札を発行・利用していました。



旅籠を利用する際に用いたと思われる宿札(場所不詳) いずれも個人蔵



美江寺宿で使われた宿札

長久手(長巻)宿で使われた宿札

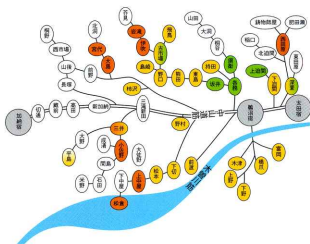
助郷すけごう

江戸時代の街道における旅人・荷物の輸送は、宿場ごとに人足や馬を交代させて運んでいました。必要な人馬は、大名や姫君などの大きな通行ともなると、宿場内でまかないきれぬものではなく、助郷と呼ばれる近在の村々から必要なだけ集めて輸送を行わなければなりません。大きな通行は農繁期と重なる場合が多く、助郷の人々の負担は大きかったようです。

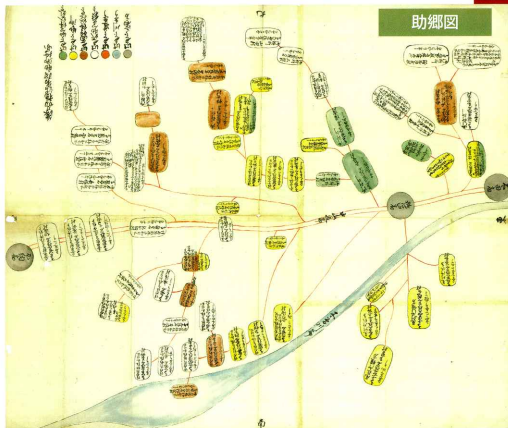
鶴沼宿の助郷

享保二年(一七七)

深萱村 迫間村
 各務村 須衛村
 持田村 飛鳥村
 古市場村 島崎村
 野口村 熊田村
 東島村 坂井村
 野村 柿沢村
 前渡村 富岡村
 橋爪村 下野村
 上野村 木津村



助郷図



鶴沼宿付助郷村繪図(年月未詳)
 桜井美保子氏蔵

旅籠

天保十四年（一八四三）の記録によれば、鶴沼宿には二十五軒ほどの旅籠屋があったといわれています。多くは農業と兼業で旅籠屋を営んでいました。

西町で旅籠屋を営んでいた茗荷屋の看板と引札が今も残っています。それらの資料に見られる「御定宿」とは、茗荷屋が各地の商人衆や講（二六・三〇頁参照）の指定を受けた旅籠であることを表しています。



茗荷屋看板



茗荷屋の看板(右)と引札(左)
梅田吉平氏蔵

この引札には、各地の商人衆や講の名前と、サービスに努めること、客引きはしないこと、などの宣伝文句が書かれています。

鶴沼宿旅籠数

天保14年(1843)

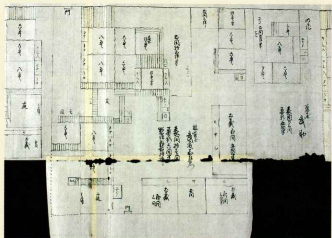
大8 中7 小10 計25軒

『中山道宿村大概帳』より

〈参考〉

中山道の平均旅籠数	27.1軒
美濃十六宿の平均旅籠数	25軒
東海道の平均旅籠数	55.7軒

この絵図による旅籠は、本陣の向かいにあった「河内屋」武藤嘉左衛門です。右図には見えていませんが、この旅籠には井戸があり、そこからくみ上げる水は、文久元年（一八六一）和宮通行時に、御膳水（お食事用の水）として使用されました。河内屋は明治以降、酒造業に専念するようになります。



旅籠屋（武藤嘉左衛門「左」と茶屋「右」）
（鶴沼宿家並絵図）より

宿場のさまざまな設備

宿場内には、さまざまな設備がありました。

見附

宿場の入口には宿内の防御のため、お城の門を真似て石垣の上に土塁を築いた「見附」がありました。残念ながら現在の鶴沼宿でその遺構を見ることはできません。



①赤坂の地藏堂

東の見附を出たところにあった地藏尊。宝暦十三年(1763)の日付と「右在所みち左江戸井ぜんこうじ道」と彫られています。



②赤坂神社参道(高札場跡)

写真の向かって右側の建物の辺りに、高札場が設けられています。



高札場跡(現在の赤坂神社前)

高札場

法令や禁令を書いた高札を掲げた場所、多くの人の目につきやすい場所に立てられていました。鶴沼宿では東の見附と天王社(現・赤坂神社)の間にあり、五または六枚の高札が掲げられていたといわれています。



高札場 想像図

鶴沼宿高札場に掲げられた高札の種類

- 火附見出し
- 切支丹宗門
- 毒薬にせ薬売
- 人馬貴目
- 親子兄弟

計5枚 【鶴沼宿万代記】

- 親子
- 切支丹
- 毒薬
- 火付
- 駄賃
- 荷物貴目

計6枚 【濃陽徇行記】

寂しい難所・かかみ野の伝説

鶴沼宿を出発し西に向かうと、三里（十二km）近くかかみ野の原野が広がっています。そこはほとんど人家が無かったようです。また山賊などが、行き来する人々を狙っていたため、旅人にとっては恐ろしく寂しい難所だったようです。現在では開発が進み、当時の面影はありません。



かかみ野の中山道

「此の野に田畑なし」

唯青草のみ生ず」

〔葦蘇路之記〕

「猶も野を行けば松多し」

六軒茶屋の村はわびしきさま也」

〔壬戌紀行〕

「か、み野広き野原也並木の松有」

此辺左の方は山見へず野原也

右は遠山見ゆ」

〔諸国道中たび鏡〕



東の難所・うとう峠

鶴沼宿の東に向かうと、赤坂からうとう峠、観音坂に至る難所がありました。このうとう峠の一里塚付近に一基の供養塔が立てられています。これは、この峠で盗賊に襲われ殺された小田原宿の喜右衛門の菩提を弔うために鶴沼の村役人が建てたものです。

山賊の話

中山道の北、現在の那加不動丘付近に低い山がありました。そこでは山賊が街道を行く旅人の様子をうかがっては仲間と「ハゴカ、オコカ。」（衣服をはぎ取るうか、止めようか）と相談して、襲い掛かっていたといわれています。そのため、近隣の村人たちはこの低い山を「ハオカ（ハゴカ）山」と呼ぶようになったといわれています。



現在の那加不動丘交差点

いろは茶屋とねずみ小僧の伝説

ある日の夕暮れ、かかみ野の中山道を歩いていた旅の娘は、「いろは茶屋」という一軒の茶屋を見つけ、一夜の宿を求めました。

夜になり、娘は言い知れぬ不安に襲われました。そこで、偶然隣の部屋に泊まっていた六十六部に相談すると、六十六部は娘と部屋を替わってくれることになり、娘は六十六部の部屋でぐっすり眠ることができました。

一方、六十六部が娘の部屋で眠っていると、何者かが部屋に入ってくる物音がします。飛び起きてその侵入者を捕まえると、それはこの茶屋の主人でした。実はこの主人、泊まった客の金銭や衣類を盗み、しまいには殺して裏庭の古井戸に投げ捨てる極悪な人物だったのです。

のちに、この六十六部の正体が江戸を賑わせていた義賊「ねずみ小僧」だと知った人々は、その手柄を語り伝えるために、いろは茶屋があ



いろは茶屋犠牲者供養碑

った場所にねずみ小僧次郎吉の伝説碑と、いろは茶屋で犠牲になった旅人を供養する供養碑を建てました。これらの碑は現在、名鉄各務原線「市民公園前駅」の北側に残っています。



ねずみ小僧次郎吉伝説碑

※ねずみ小僧とは…

江戸後期の盗賊。名前を次郎吉といい、大名・武家屋敷にしか忍び込まなかったといわれています。盗んだ金銭はほとんど江戸の貧しい庶民に分け与えたという伝説があり、義賊と呼ばれましたが、天保三年（一八三二）に捕らえられ、処刑されています。

※六十六部…

諸国を巡礼し、六十六ヶ所の霊場に法華経を一部ずつ納めて歩く僧。六部ともいう。

間の宿・新加納

新加納（現在の那加新加納町周辺）は、鶴沼宿と加納宿の中間に位置し、旅人の休憩ポイント「立場」として旅人をもてなす茶屋などがありました。正式な宿場ではなかったため、基本的に宿泊は認められていませんでしたが、旅籠を営む人々（家）も



現在の新加納の様子

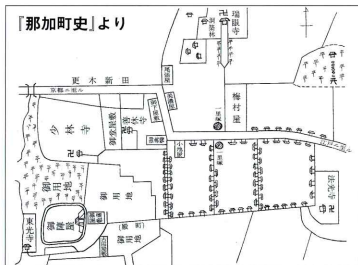
あらわれたようです。また、「枳形」というカギの手状の宿場の町並みを持ち、近くに旗本坪内氏の陣屋があったことなどから、単なる立場ではなく「間の宿」として宿場に近い賑わいをみせていたようです。

梅村屋

新加納にあった梅村屋は領主坪内氏の接待所として利用されたり、武士や公家など身分の高い人びとの旅の休憩所「小休本陣」として利用されていました。和宮お輿入れの際にも小休所として利用されています。

道標

新加納の高札場があったとされる場所の近くに道標があり、「右京道」「左木曾路」「南かさ松」と彫られています。



各務郡新加納村略図(年月未詳) 原図瑞眼寺蔵

街道・宿場の雑学事典

中山道の基礎知識

中山道を彩る人々

庶民の旅

宿の機構

宿泊施設

中山道の基礎知識

「中山道」か「中仙道」か？

正徳六年（一七一六）、幕府より「中山道は今まで仙の字を書いていたが、これからは山の字を使うように」との通達が出された。正式には「中山道」が使われるようになりまし。しかし、一般の書籍などには「中仙道」と標記することもありまし。

五街道

全国を結ぶ主要街道として位置付けられた五つの街道で、東海道・中山道・奥州道・日光道中・甲州道中がそれにあたります。中山道は慶長七年（一六〇二）、前年の東海道に続いて宿駅伝馬の制が敷かれ、寛永十七年（一六四〇）頃にはほぼ整備されたといわれています。

中山道のさまざまな呼び名

「山道」

東海道（海道）に対して。

「木曾街道」「木曾路」

木曾地方を通っているため。「木曾海道」「岐蘇路」などの当て字もある。

「姫街道」

お奥入れの姫君が多く通行したため。

道中奉行

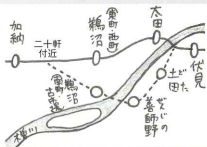
万治二（一六五九）

に設置され、五街道と宿駅の整備や取り締まりなど街道に関する事務を行いました。

幕府では大目付と勘定奉行が道中奉行を兼ねていました。

ルート変更で宿場も移動？

中山道は慶長七年（一六〇二）に、律令時代から続く東山道や時の支配者たちが作った道を原形にして宿駅制が整備されました。宿場はもとともあった集落に形成されることもありましたが、細久手宿（現在の岐阜県瑞浪市）などのように、周辺の村から住民を集めて宿場を新設したところもありまし。



新・旧中山道コース

鶯沼宿は、慶長年間（一五九六〜一六一五）には宿駅として機能していたようです。その当時の場所は木曾川沿いの南町・古市場の辺りでした。その後、寛永十八年（一六四一）の記録で現在の東町・西町にいたる部分に「伝馬町」という名が登場しています。「鶯沼」善師野・土田コースが寛永期から元禄にかけて「鶯沼・太田・御嵩」コースに変更されるのに合わせて、鶯沼宿の場所も川沿いから山の方へ移転したのではないかと考えられます。



太田の渡し跡

3 大難所

・木曾の棧

福島宿と上松宿の間にあり、川を渡る為の橋ではなく、崖沿いの道が途切れたところを通行できるように渡した橋。

・太田の渡し

伏見宿と太田宿の間にある木曾川の渡船。

・碓氷峠

坂本宿と軽井沢宿の間にある峠。峠の坂本側は道が険しく、二里十六町(約十二km)にわたって急坂を上がったり下ったりした。

関所

街道には、通行者や荷物をチェックする関所が設けられており、往来手形(二六頁参照)がなければ通過できませんでした。

中山道には、碓氷関所(松井田・坂本間)と福島関所(福島)の2ヶ所があり、さらに諸藩では、他領へ通じる要所に口留番所を設置して、人や物資の出入を監視していました。

立場

立場は、街道筋の村々や風光明媚な場所に設けられた休憩場所です。中には新加納(各務原市)の立場のように、大名などの休憩に供する小休本陣が置かれたところもありました。

各務原市内には二十軒(三ツ池)・六軒茶屋 新加納に立場が設けられていました。

一里塚

一里塚は、一里(約四km)おきに道の両側に作られた塚で、松や榎などの樹木が植えられています。各務原市内には四ヶ所に一里塚がありましたが、現在ではとうとう峠の一里塚が現存するのみです。

各務原市内の一里塚

- うとう峠(松)
- 各務山の前(松)
- 六軒東方(松)
- 新加納村(榎)

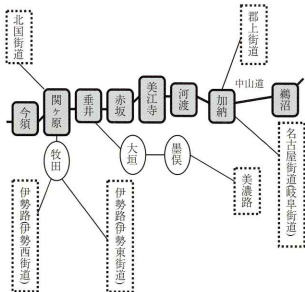
うとう峠の一里塚



脇街道

中山道から各地を結ぶ道を脇街道といいました。岐阜県内には

- ・美濃路(垂井・熱田)
 - ・伊勢路(関ヶ原・多良(高田))
 - ・北国街道(関ヶ原・敦賀)
 - ・名古屋街道(加納・名古屋)
 - ・郡上街道(加納・高山)
- などの脇街道がありました。



中山道を彩る人々

大名行列

参勤交代で中山道を通行した大名は東海道の一四〇余家に比べ、三〇〜四〇家と少なかったようです。

行列が休憩・宿泊する際には、大名の名前を書いた関札を本陣や宿場の出入り口に掲げ、宿役人が羽織袴を着て宿のはずれまで行列を迎えに出しました。お供の武士たちは、それぞれ宿場内の旅籠に分かれて泊まりました。その際の宿泊代は事前に宿場側と交渉し、一括で支払われたり、個人個人で支払われたりしました。

中山道を利用した主な大名

(文政5年(1822))

金沢 松平加賀守

加納 永井肥前守

彦根 井伊掃部頭

大垣 戸田采女正

など

※東海道通行と決まっていますが、彦根・大垣藩などのように、中山道を通して良いことになっていた藩もありました。

中山道は東海道ほどではありませんが、多くの大名や姫君らの通行がありました。鶴沼宿もこれらの人々の通行で賑わいました。

お茶壺行列

將軍家や水戸徳川家へ献上するお茶壺を運ぶ行列が中山道を通りました。

水戸徳川家のお茶壺行列は鶴沼宿に宿泊することが多く、享和元年(一八〇一)を初めてして計十一回分の通行の記録が残っています。

日光例幣使

毎年四月に行われる日光東照宮の大祭に、正保四年(一六四七)から慶応三年(一八六七)まで一度の中断も無く朝廷から参議格の公卿が使者として送られていました。百人ほどの行列が行き中山道、帰り東海道を通ったといわれ、鶴沼宿は主に人馬継立と小休で利用されていたようです。

御牛様を通る

寛政十一年(一七九九)、西国から幕府へ送る白牛が中山道を通りました。宿々では、白牛に同行する役人に対して「馳走や引物の準備で大変だった」といわれています。

赤報隊

赤報隊印鑑
榎井美保子氏蔵

慶応四年(一八六八)、幕府勢力一掃を進めるため鎮撫使が各地に派遣されました。その先行隊として活躍したのが赤報隊です。相良総三率いる一番隊が中山道を年貢の半減などを布告して東に進みました。榎井家には赤報隊の印鑑(使用する印を照合する鑑)が残っています。

赤報隊

印鑑

榎井美保子氏蔵

が赤報隊です。相良総三率いる一番隊が中山道を年貢の半減などを布告して東に進みました。榎井家には赤報隊の印鑑(使用する印を照合する鑑)が残っています。

輿入れ行列

中山道は、將軍家・大名家へ嫁ぐ姫君が多く通行し、姫街道とも呼ばれました。最も盛大だったと言われるのが文久元年（一八六一）、十四代將軍家茂へ嫁いだ皇女和宮の輿入れ行列で、通行の様子を知ることのできる資料が各地に残されています。

（和宮の通行）

鶴沼宿には、十月二十七日、昼休憩のため本陣に立ち寄っています。その準備のために本陣では建物の改修・増築を行ったり、食器などを美濃国鶴多須代官・尾張国北方代官・太田陣屋などから借りたりと大変な騒ぎになりました。和宮が召し上がった料理の記録は見つかっていませんが、用意された食材についての記録が残っています。

鶴沼宿本陣で 用意された食材

（鶴沼の歴史より）

鯛	3枚	4貫500文
中鯛	2枚	4貫800文
鮓	14枚	2貫800文
大かぶら	2個	24文
清松茸	16本	348文
松海月	1合5勺	48文
水菜	2株	24文
房大根	2ふさ	248文
えのき茸	50枚	424文
小梅干	60	24文
塩	1升3合	52文
薪	5束	248文
柴	1束	16文
炭	2俵	600文
小豆	5合	100文

1貫文=1000文

中山道を利用した主な姫君

享保16年(1731)	比 宮(9代家重へ)
寛延2年(1749)	五十宮(10代家治へ)※鶴沼泊
文化元年(1804)	栄 宮(12代家慶へ)※鶴沼泊
天保2年(1831)	有 姫(13代家定へ)
嘉永2年(1849)	寿明姫(//)
文久元年(1861)	和 宮(14代家茂へ)※鶴沼昼休

伊能忠敬

文化六年（一八〇九）八月に江戸を出発した伊能忠敬が測量方の一行十七名が中山道を通りました。鶴沼宿では、野口三右衛門・桜井岡右衛門の両名を細久手宿まで挨拶に行かせています。

伊能忠敬一行は同年十月十七日、太田宿を出たのち、うとう峠の上で昼食を取ることになり、用意された「ねぶかぞうすい（葱雑炊）」を多く食べたとの記録が残っています。その日は鶴沼宿に泊まることになり、宿役人が羽織を着て出迎えています。

水戸天狗党

一橋慶喜に勤皇の志を訴えるため、水戸藩士武田耕雲斎の一行千人余りが中山道を西に向かいました。抜刀した騎馬を先頭にした一行の様子を見て、鶴沼宿を守っていた高須藩尾張支藩の兵は大安寺に隠れました。また、小牧まで出陣していた尾張藩兵も、迎え撃とうとませんでした。

鶴沼宿では、女・子供を親戚に預けて、男たちが本陣に集まり、加納宿への連絡などで騒然としていました。そんな中、尾張藩に敬意を表し檜の穂先に白紙を巻いて鶴沼宿に入った一行は整然と宿泊し、耕雲斎は本陣に宿泊しました。

その頃、加納城下の中山道では加納藩が、河渡では笠松郡代が、美江寺では大垣藩が待ち受けており、これら突破するのは容易でないと判断した一行は、翌朝鶴沼宿を出発し、二十軒から蘇原・芥見を通り、長良川を渡って高富に宿泊しました。その後、揖斐へ進み、根尾谷を越えて越前に向かった一行は加賀藩に降伏。翌年、多くが越前敦賀で処刑されました。

旅の持ち物

江戸時代の旅行案内書には、旅行中に用心することや旅に出る際に携行していくとよい道具が紹介されているものが多く見られます。当時は徒歩での旅が多いため、持っていく荷物はなるべく少なく、小さくすることが薦められました。また、舟などの乗り物酔いに対処する方法や大水の時の注意なども紹介されていました。

旅に持っていくと良い物

矢立	筆記具
針・糸	針・糸
髪結い道具	ブラシ・ヘアワックスなど
ちょうちん	懐中電灯など
ろうそく	ロウソク・ペンライトなど
火打ち道具類	マッチ・ライター
扇	扇子・うちわ
心算手帳類	日記・手帳
麻綱	ロープ・ひも
巾着・皮袋	持込用バッグ
懐中鏡	コンパクト
印版	印章・はんこ

旅行用心集(文化7年(1810))

矢立

筆と墨壺が一体になった筆記用具。



印籠

携帯用の薬入れです。



財布

旅費(路銀)は用心のため、いくつかの財布に分けて持っていました。



道中用心すること

・狐狸のしわざといって奇異なことが起こった場合は、まず心を落ち着けて一休みし、元来た道を考えてみる。

・旅先で自分の国とは異なる言葉つきや風俗に出合い、変に思ってもお互いさまのことなので、笑ったり馬鹿にははいけない。

…など

旅にかかる

日程・費用は？

「お江戸日本橋七ツ立ち：」との唄があるように、当時の人々は七ツ(午前四時)ごろに出発して旅をしていたようです。

旅の費用(路銀)は、江戸時代後期(一八〇〇年ごろ)には片道で二両(約十二万円)ほどかかったといわれています。(当時の一両は現在の六万円と換算)

費用の目安

串団子	4文
大福餅	4文
草鞋(そうり)	16文
旅籠代(中級)	200文

(1800年ごろの相場)

旅の日数

	男性	女性
1日に歩く距離	9里(約36km)	5~6里(約20~24km)
中山道を歩いた場合の日数	14~15日	20日前後

※川留めや寄り道などが無かった場合
※中山道の距離…約136里(約534km)

宿の機構

宿場には、荷物などを運ぶ人馬の手配や旅人の休泊の世話などの事務を行う問屋(場)があり、問屋(役)の下には、年寄・帳付・人馬指などの宿役人が働いていました。宿役人は武士ではなく、多くは村の庄屋などの仕事を兼務していました。また、実際に荷物などを運ぶ人足や馬は、宿内のほか必要に応じて近隣の村からも集められました。それを助郷といっています。

御伝馬人足

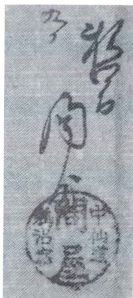
荷物などの輸送に必要な人馬で、中山道では五十人の人足と五十匹の馬(のちに二十五人二十五匹)を常備しなければいけません。これを伝馬役といい、一般的には宿内の住民が負担したといわれています。

宿困人馬

急な荷物などの輸送に備えて鵜沼では人足六人と馬四匹が置かれています。



前田信濃守投札印鑑 人馬指鑑 中島影家文書



鵜沼宿問屋の印判 鵜沼の歴史より

村と宿場

鵜沼宿が置かれた鵜沼村は、慶長十七年(一六二二)より尾張徳川家の支配を受けていました。村には西町・東町・羽場(巾)など各郷ごとに庄屋・組頭などの村役人が置かれていました。一方で、中山道に接する西町・東町のうち、見附から見附までの間は「宿内(宿方)」と呼ばれ、道中奉行支配の下にあり、問屋・年寄などの宿役人が置かれました。西町の桜井家・東町の野口家はそれぞれ問屋と庄屋を兼ねていた時期が多かったようです。宿方と村方の間では、伝馬の負担や財政について度々紛争が起っています。また尾張藩は、領内の宿場に助成を行っていることから、宿場の運営は単に幕府・道中奉行の支配だけで成り立っていたというわけではなく、領主の援助によるところが多かったようです。

尾張徳川家
 ・御伝馬運賃(30馬/年)
 元禄7年(1694)より
 ・問屋給金
 (5両/年・2人分)
 元禄8年(1695)より
 など

幕府
 ・道中奉行の設置
 万治2年(1659)
 ・懸賞銭(元領額公定)
 正徳元年(1711)
 など

鵜沼村
 ・伝馬金・宿利税の負担
 ・村の庄屋と宿の間置け兼務する時期が多かった。
 (西町・桜井家、東町・野口家)
 など

鵜沼宿と幕府・領主・村との関係

街道輸送の仕組み

街道を行き来する人や荷物は、宿場間をリレー方式で運ばれました。公用の旅人や荷物の運賃は無賃もしくは「御定賃^{ごぢやうぢやん}」でしたが、一般の人々は人足との直接交渉で運賃を支払っていました。これを「相対賃^{あたいぢやん}」と呼びます。後者は前者より高い相場となりました。

本駄賃(本馬)

一匹の馬に荷物だけを積んだ運賃。

乗掛

荷物を両端に乗せ中央に人が乗る。荷物は10貫～18貫。

軽尻

人を乗せることを主としている。荷物は3貫～6貫まで。

人足

馬ではなく人が荷物を運ぶ。荷物は5貫まで。
(1貫=3.75kg)

鶴沼宿 美濃国宿駅人馬賃銭表(濃州御行記/濃陽志略より)

	上り(加納方面)			下り(太田方面)		
	人足1人	本馬1匹	軽尻1匹	人足1人	本馬1匹	軽尻1匹
元賃銭	83	170	116	47	94	61
寛政11(1799)	95	195	133	54	112	70
文政6(1823)	124	249	166	68	140	88
文久2(1862)	149	299	204	82	169	111
文久3(1863)	166	336	226	92	187	123
慶応4(1868)	647	1293	872	365	733	474
明治2(5月1日)	734	1467	988	416	831	539
同年(5月6日)	949	1902	1280	537	1074	695

単位:文

助郷の種類

定助郷	宿から2里内外の村で、平常宿駅に対する人馬の補給義務を持つ。
大助郷	大名などの大きい通行に際し、定助郷の補助として徴用。
増助郷	宿から5里内外の村に割り当てられた。加助郷とも言う。
代助郷	助郷村の天災などの事情で割り当てられる。
当分助郷	特に大行列だった和宮通行の際に遠い村に指定された。

※往来が盛んになると定助郷と大助郷の区別が無くなる。

助郷

鶴沼宿の助郷は、ほ現在の各務原市全域に広がっています。宿場から遠い村では、働き手が助郷役を勤めるのに泊りがけで出かけていくため大変な負担でした。また、人足の負担や賃金などの問題で宿と助郷が対立することが多かったようです。

掃除丁場

中山道沿いの村々には、助郷役の他にも道の清掃・維持管理や松並木の手入れなどの仕事それぞれ割り振られていました。村々では、それを家ごとに分担するなどしていました。

掃除丁場の村(各務原市内分)

鶴沼村・各務村・大島村・北洞村・前野村・西市場村・山後村・長塚村・岩地村・桐野村・新加納村：計十一か村

宿泊施設

宿場は、人々の旅の疲れを癒す場でした。ごく限られた人しか泊まることのできなかった本陣・脇本陣のほか、庶民でも泊まることのできた旅籠・木賃宿などが軒を連ねていました。

宿泊施設の種類

本陣

大名など地位の高い人が泊まるための施設で、徳川家康が江戸と京の間に作らせた御茶屋屋敷(簡易城郭)がはじまりといわれています。本陣の敷地は除地(土地にかかる税が免除)とされました。

脇本陣

規模は本陣より小さいものの上段の間を持ち、公用の武士などが利用するほか、本陣が差しかえる場合などに大名が宿泊しました。通常は旅籠屋を兼ねていたようです。

飯盛旅籠

飯盛女がいる旅籠。平旅籠よりも宿代は高い。鶴沼宿に飯盛女がいたかどうかは記録がない。

平旅籠

一般的な旅籠。一泊二食で相部屋が多い。宿代は文化・文政期(一八〇四～一八三〇年)で一〇〇～三〇〇文

木賃宿

古くから見られる宿屋の形態。薪代のみを支払い、持参した食糧で自炊する宿。

旅籠講と定宿

江戸時代の各宿場では、旅籠の強引な客引きや、サービスに差がありました。そこで、文化元年(一八〇四)に結成された浪花講をはじめとして、良心的で安心して泊まれる旅籠を登録する様々な旅籠講が結成されるようになりました。講に加入した旅籠では講の看板を掲げ、また人びとは講の定宿帳をもって旅に出发していきました。



現在の鶴沼宿(西町の町並み)

索引

- [あ]
相対貨銭 ————— 29
赤坂神社 ————— 2.16
赤坂の地藏堂 ————— 2.16
秋葉神社 ————— 2.9.17
伊能忠敬 ————— 25
いろは茶屋 ————— 3.19
印籠 ————— 27
うとう峠の一里塚 ——— 2.23
鶴沼村 ————— 28
梅村屋跡 ————— 3.20
御牛繰 ————— 24
往来手形 ————— 26
御定貨銭 ————— 29
小田原宿喜右衛門供養碑 -2.18
お茶壺行列 ————— 24
尾張藩 ————— 28
- [か]
各務山の前一里塚跡 ——— 2.23
和宮 ————— 25
金山川 ————— 8.17
- 蛭尻 ————— 29
河内屋 ————— 2.9.15
高札場 ————— 2.8.16
合戸池 ————— 2
五街道 ————— 22
奥入れ行列 ————— 25
御伝馬人足 ————— 28
小休本陣 ————— 20
- [さ]
財布 ————— 27
坂井家 ————— 12
坂井家 ————— 10.11
3大難所 ————— 23
宿團人馬 ————— 28
宿札 ————— 13
常夜燈 ————— 2.8.17
新加納一里塚跡 ——— 3.23
水路 ————— 17
助郷 ————— 14.29
関所 ————— 23
赤報隊 ————— 24
- 掃除丁場 ————— 29
- [た]
大安寺大橋 ————— 2.17
大安寺川 ————— 2.9.17
代参講 ————— 26
大名行列 ————— 24
立場 ————— 3.20.23
伝馬町 ————— 22
道中奉行 ————— 22
問屋 ————— 13
- [な]
中山道宿村大輿輓 ——— 9.15
日光例幣使 ————— 24
二之宮神社 ————— 2.17
人足 ————— 28
ねずみ小僧 ————— 3.19
乗掛 ————— 29
野口家 ————— 2.8.13
- [は]
旅籠 ————— 15.30
本陣 ————— 2.9.10.30
- 木駄賃 ————— 29
- [ま]
栴形 ————— 20
松尾芭蕉句碑 ————— 2.12
道標 ————— 3.20
見附 ————— 8.16
水戸天狗党 ————— 25
茗荷屋 ————— 2.9.15
名所図絵・道中記 ——— 26
- [や]
矢立 ————— 27
宿役人 ————— 13
路銀 ————— 27
六軒一里塚跡 ————— 3.23
- [わ]
脇街道 ————— 23
脇本陣 ————— 2.9.12.30

参考文献

- 『各務原市史 通史編 近世・近代・現代』昭和62年3月
『鶴沼の歴史』昭和41年
岐阜県博物館「中部未来博88記念展 中山道美濃十六宿」昭和63年7月
横山 佳雄『各務原歴史散歩(二) 中山道鶴沼宿図録』平成4年12月
太田 三郎『生きていた美濃中山道』教育出版文化協会 昭和52年
太田 三郎『中山道—美濃十六宿』創研社 昭和44年
稲垣 史生『歴史を旅する日本の街道事典』三省堂 1983年11月
児玉 幸多『近世交通史の研究』筑摩書房 昭和61年8月
石川 英輔『ニッポンの旅 江戸達人と歩く東海道』平成19年9月
西 和夫『中山道鶴沼宿の幕末期の様相—建物の復原検討を中心に』
『歴史と民俗』神奈川大学日本常民文化研究所 2006 pp7~30

各務原市資料調査報告書 第31号

探してみよう 歴史の足跡
中山道と鶉沼宿

平成20年3月発行
平成27年3月改訂

編集 各務原市歴史民俗資料館
〒501-6022 岐阜県各務原市鶉沼西町1-116-3
TEL 058-379-5055

発行 各務原市
〒504-8555 岐阜県各務原市那加桜町1丁目69番地
TEL 058-383-1111(代)

印刷 山興印刷株式会社

